



Sepia

紫峯蓮舞

プロローグ

——— お久しぶり、恵里です。

突然そんなメッセージが飛び込んできたのは、昨日の事だった。たしか夜中の3時ごろだ。床に投げていたスマホのパイプが俺を叩き起こしたんだ。ボンヤリした頭で拾い上げて画面を覗き込むと『メール着信』の眩しい白い表示が。また、友達になりすました『迷惑メール』の類かと思ってた。でも、タイトルに記されていた名前を見た俺の寝ぼけた頭は一気に冴えわたり、いてもたってもいられなくなってメールを開いていた。

送り主は、初恋の相手だった。

中学の恋～嘘デート事件～

といっても、ほとんど片思いみたいなもんだった。悲しいかな、実は向こう方には嫌われてたらしくて・・・そんな状態だったから、なかなか煮え切れずにいた。そんな俺の際につけ込んだのは

新たな“可愛い子”の出現

だった。どうも自分は『一途な恋』ってのに向かない性分のように、クラスの離れた初恋の彼女を忘れて同じクラスの別の女子にうつつを抜かしてしまったというわけだ。そのくせ告白までしちゃって——

もちろん、結果はアウト。終わってみれば

『性格もキツそうだったし、まあイイか』

なんて自分をごまかしてるけど、実は“フラれた原因”は俺自身にある。

告白した時は——— 悪友を信じた俺がバカだったんだけど ——— 来ないはずのないギャラリーに好奇の眼差しで見守られながら、相手の返事を待たずに

『ダメなら友達から』

なんてさ・・・・・。あれだけ見られてて彼女の微妙な表情を見れば、ダメだって事くらい分かるよ。だから、つい言っちゃったのかな。まあでも、あからさまに『イヤ!』って言われるより、『それなら・・・・・』って頷かれるほうがまだ救われるっていうか、ショックは少ないから。なのに、なのに俺は

今度の日曜二人で会う約束した

なんて吹聴しちまったもんだから、例の“悪友ネット”が黙っちゃいなかった。その『感染力』を甘く見てたんだ。

嘘がバレた月曜日、何となく落ち着かずに廊下を歩ってた俺を呼び止めるキツイ声。恐れていた事がついに起こってしまった。振り向くとそこには鋭くにらむ彼女の姿があった。俺が謝る間もなく

「私好きな人いるから」

じっと見据えて、彼女は吐き捨てるようにそう言った。その瞳には俺への嫌悪感をむき出しにしているのが分かった。8年経った今でも、フッとその時の事が頭をよぎるだけで胸が締め付けられる。それ以降彼女は、二度と目を合わせてくれなくなり、話しかけても完全に俺を無視。それは、もう ———

『罰』だと受け入れる他なかった。

ついこの間まで笑いかけてくれ、声を掛ければごく普通に答えてくれた子がいなくなってしまったんだ。

本当は、いつでも彼女を呼び止めて謝りたかった。

誰もいない公園に悪友どもを引っかけて誘い込む

そんな『嘘』をついた理由を話したかった。でも俺はその時、変に勘ぐって動けずにいた。“しつこい男”だと思われなくなかったんだ。

『嘘つき野郎』——— 当然の事だが、以来俺は悪友ネットの間でそう呼ばれるようになった。もともとさほど友達らしい友達でもなかったから、そんなのは勝手にさせてた。何言っただってバカにするような奴らだもん。相手にするだけ無駄だ・・・・なんて強気でいても、当時は初恋のあの子の様子をかなり気にしてた。でも、あの子の頭の中には俺が衝撃的な失恋をした事なんか——— そんな事は、全然気づいてもいないようだった。遠くから目にしたあのすました顔は、ひよっとすると俺という存在すら忘れていたのかもしれない。

でも高校受験が近づくにつれて、そんな色恋沙汰どころじゃなくなるわけで。なのに3年になって、初恋のあの子と同じクラスになっちまったりして——— 何たる運命のいたずら(笑)。ところが、不思議な事にそれまで嫌われていると思ってた俺が、彼女の中で少しずつマシになってきてるんじゃないかって思う瞬間が。

あれは、いつかの放課後だったかな。どういったわけか、すごく自然に補習的な感じで彼女の受験勉強を手伝う事になったんだ。なんと、彼女から俺に質問をしてきてくれたのがキッカケだった。そこそこ得意だった英語ならまだしも、どっちかって言ったら苦手な数学をエラそうに

『教えてやるよ』

なんて。絶対あの時の俺は嬉しくてウキウキしてたに決まってるんだ。もう、何をどう教えたかなんて全然覚えてないけど・・・・机についていた彼女に顔を近づけた時、鼻をくすぐったほのかな石鹸の匂いそれだけは今でも忘れられない。

——— ちょっとだけドキドキしたな・・・・これが女の子ってヤツなのか。

高校の恋～ほっぺた事件～

ま、色々あって。高校に入っても、俺はまだ懲りてなかったんだ。初恋の彼女を忘れて
——って、さっきからおんなじ事ばかり言ってるけど。……あっ、そうそう！
俺って実は、ほっぺたの感触が好きなんだけど……たとえば赤ちゃんのとか
思わずツンツンしたくなっちゃったりしてさ♪ってコトで、今回に関しては多分 ——
いや、きっとあの女子の『ほっぺた』に惚れちゃった(!)んだと思うな一。とはいえ、
そりゃ顔も結構可愛い感じだったのには違いなかったよ？ただ、なんでいつも
こうなのかって思うんだけど……また、出会うのが遅すぎたんだ。

恋愛なんてそっちのけの、高3の……それも二学期。第一印象は中学の時と
ほとんど同じだった。最初は何の気もなく普通に接してたのに、ある瞬間から ——

彼女のほっぺたが無性に気になり始めたんだ。

でも、そんな事他のみんながいる前で言えないじゃないか。だから、彼女をそっと
教室の外へ呼び出して

「……何？」

「えっ……いや一、その。ちょっと、お願いがあるんだけど」

彼女は少し戸惑いを隠せないようだった。そりゃ、そうだよな……いったい
何のお願いだって話だ。だから、沈黙が俺の口を閉ざしてしまう前に、
もう思い切って言っちゃったんだ。

「その———— ほっぺた、ツンツンさせてくれないかな」

思い出すだけで、あの時の自分にゾッとする。よくもまあ平気で言えたもんだ。ただその時は自分も気持ちが焦ってたから、そんな…………言動を顧みる余裕なんか無かった。

———— また、睨まれた？

いやいや、今回は相手が良かった (笑)。

———— って事はひょっとしてオーケーされたとか？

いやいや、サラリとかわされちゃったよ。

「私のほっぺた!? ————— え…………でも、カタいよ？」

…………違うんだよなー。硬いとか柔らかいとか、この場合はそんな事よりも

君のほっぺた

ってトコが重要だったのに。結局、俺の夢は幻と消えちまった。『ほっぺツンツン』こんなフザけた言葉の奥に秘めた思いなんて、伝わるわけがなく。でも、分かってほしいのは、わざわざこうやって女子を呼んで ————— どんな事であれ、何かしら特別な思いを話そうとする時には、色々とメンタルな部分で段階を踏んできているって事なんだ。

————— だって…………そもそも嫌いだったら、ここまでやらないだろ？

だから俺は『ほっぺた』まで言わせたギリギリのところにあった気持ちを、その日の夜電話で打ち明ける事にしたんだ。

「あの・・・・・・・・今日はゴメンな、ヘンな事言っちゃって。やっぱやだったよな？」

「うん、ちょっとね」

「ほんとゴメンッ」

何とかして、ねじれそうになった関係を元に戻そうとした。でも、俺の熱く脈打つ胸は

「うん————— どうしたの？今日は。それだけ？」

沈黙を破った彼女の声は、俺の口を滑らせたんだ。もう一秒でも早く、何もかもさらけ出してすっきりしたかった。たとえ、まだ穏やかだった俺たちの間に波風が立って、中学ん時の二の舞になったとしてもな。

『・・・・・・・・でもッ、でもね？今はそんな事より受験の勉強しなきゃ。勉強してる？』

『ん、分かってる。分かってるけどッ・・・・・・・・俺だって言いたかったんだ。どうしようか迷ったけど、やっぱり。だからさ、明日！明日、答えを聞かせてほしい』

『分かった————— じゃね？バイバイ』

次の日の昼休み、俺は少々デジャヴを感じながら、また彼女を呼び出した。

「・・・・・・・・」

うつむき加減で姿を見せた彼女は、顔を上げて微笑んでいた。何も考えられなくなっていた俺は、その笑顔に隠されたメッセージに気づく事が出来なかった。本当は、もう結果が出ていたんだ。

————— 彼女が、笑ってくれた瞬間に。

「ゴメンな、昨日。で・・・・・・・・さ、その———— 返事を、聞かせてほしいんだけど」

二人を包み込んでいた気まずい空気は、いつしか彼女から笑顔を取り込んでしまっていた。

「うん、『好き』って言ってくれるのは嬉しいよ？嬉しいんだけど」

ゴメン。私、好きな人いるんだよね————

不思議だったのは、それを耳にしてもあんまり悲しくなかった事かな。何か逆にスッキリして心地よささえ覚えていた。

「いやァ、それなら仕方ないよ。こっちこそ、悪かったな」

「ううん、そんな。ゴメンね本当に」

とりあえず結果は同じでも三年前とは、えらい違いだった。だから俺はまた魔が差さないうちに、そそくさとその場を離れたんだ。二度と振り返らなかった。だって、もう未練も何にもない。ちゃんと、他の誰にも聞かれないで彼女だけに想いを打ち明ける事ができたんだから。

「・・・・・・・・」

気づいたら、“いつもの場所” 誰もいない校舎裏に立ち尽くしていた。その、あまりの静けさと、ぬけるように青い空にぽっかり浮かんだ白旗は、俺の本音を浮き彫りにするだけじゃ飽きたらずに、彼女の言葉が単なる体のいい口実に過ぎない事まで教えてくれた。

———— 俺って・・・・・・・・いつもこう。

大学の恋～まぼろしの君～

たしかに、全然ショックじゃなかったって言ったら、そりゃ嘘になるよ。
でも、引きずったりしない。俺にとっては恋だの愛だのっていうのは——
さほど重要じゃないんだ。二回も告白してる奴が何言ってんだよって？

—— 中学卒業以来ですね。どうしてですか？・・・元気になっていますか？

誰かに切なさを覚えて胸が苦しくなった時は、その事を相手に伝えられさえすれば俺は満足なんだ。その結果がどうであれ、喉のに引っかかった鬱陶しい魚の小骨は消えてなくなる。

でも、小6の時に俺の心をグラグラ揺らした松木恵里の場合は全てが覆されてしまう。あんなに好きだったのに、告白する事ができなかった。告白する気にもならなかったんだ。自分の中で、松木への想いを確かめるだけで精いっぱいだった。生半可な気持ちで伝える事なんて出来ない。ましてや、あんな悪友ネットが幅を利かせてるような環境で。俺は、ドロドロに汚れた心の中で唯一純粋だと言えた松木への愛を封印しようとした。・・・言い訳がましいかもしれないが、その苦肉の策が過去の二度の過ちだったとしたら？今思えば本当にそんな気がしてならないし、あの頃に苦味を味わえた事に感謝したいくらいだ。

いまだに夢にあの子（恵里）が出てくる。あの日から7年も経ってるっていうのに。そう、夢の中じゃ俺はあの子にかなり近づいてる。吐息が触れるくらいそばで、楽しそうに言葉を交わしたり—— 夢は儚いものだっていうなら、目が覚めた時のあの喪失感は何だ？やっぱりこの感情は本物なんだ。過去の二人に対して抱いていた不確かで連鎖的な恋心とはワケが違う。もう迷わない。いつか伝えられるその時が来るまで、ずっと温めていようと思っていた矢先のメールだった。

それはあくまで淡々と綴られていたが、まるで夢の中のように親しげだった。
そこかしこに出てくる流行りのタレントやアーティストの名は、ずっと会っていない
あの子も今、俺と同じこの時を生きている事を確かなものにしてくれた。

————— 今度の日曜、会いませんか。中学に行く道の古いお店跡のところで
待っていてください。

それまでの時間をスキップしたかのように、募る想いは、メールが届いたあの日から
今日 ————— 日曜までの記憶をゴツソリと抜き取ってしまっていた。俺は、もう一度
メールを開こうとしたんだが何故かフォルダの中にあの子のメールだけなかったんだ。
ひょっとすると、迷惑メールを消すいつもの癖で一緒くたになって消しちゃったの
かもしれない・・・・・・・・マジかよ。

俺は松木がいつ現れてもいいように、朝イチで待ち合わせの場所へ向かった。
少しでも早く会いたって気持ちが強かったし、まず時間が分からなかったから、
もし……もう来てたとしたら。少しでも遅れてしまえば本当に夢のように消えて
いなくなってしまうような気がしたんだ。

それにしても、あんまりモヤがかかりすぎちゃってて。周りの風景にしたってそうだし、
俺の頭の中にも。スマホで時間確認したら、案の定まだ6時前だった。

「へえ —— ?」

いくら何でも、もう来てしかも怒って帰っちゃったなんて事はないよなあ？気を紛らす
つもりで首を振ったら向こうのほうに中学が見えた。そうだよな、あの頃はあの子も
俺もあそこに通ってたんだ。……懐かしいな。

—— そうそう、ちょうどあんな感じで制服着てたよ。俺無理やり風紀委員やらされて
校門に立ってたからよく覚えてんだ。

後ろを向いた俺の目に映るその女子は遠くから少しずつ近づいていた。

・・・・・・・・相変わらず風紀も大変だな。こんなに朝早いんだから ———— って

「えっ・・・・・・・・」

ちょっと待てよ、今日って・・・・・・・・日曜だろ!?

しかもその女子は、こっちに向かって嬉しそうに手を振っていた。『俺にか?』
いくらキョロキョロしても他に誰もいるはずがなく、小走りに駆け寄ってくる姿、
その面影ははますますあの頃のあの子にそっくりだった。

「来てくれたんだ」

たまたまそっぽを向いていた俺に優しくそう言った声色はまさに松木恵里のものだった。
本当にあの頃と全く変わらなかったんだ。あまりの生々しさに、俺は金縛りにあったみたいに
その女子（松木恵里）と目が合わせられなかった。

「どうして、そんなカッコしてんの？」

少し俺の声が響いた後で聞こえてくる小鳥のさえずり。また・・・・・・・・あの、イヤな沈黙だ。

「えっ、どうしてって」

「その服だよ！なんで、今さらそんな————」

『……………ッ!?!』 やっと顔を向けられたのに、その女子の姿を目にした途端涙が出そうになったんだ。やっとあの子に会えたから？違う、そんなんじゃない。松木は、少しも変わっちゃいなかった。

———— 何もかもが7年前……………昔のまんまだったんだ。

「私立、受かったよ」

あの子が本当に嬉しそうに笑顔を見せてるから、俺も思わず頬が緩んじやったよ。
……………だってあの日は何にも言えなかったもんな。

「俺が勉強手伝ったおかげだな」

俺は握手をしようとスッと手を差し出したんだけど、

「えっ？」

松木は怪訝そうな顔でこっちを見つめてきた。

「いや何でもない。———— とにかく、おめでとう。良かったな」

「うんッ、ありがと♪」

ようやく俺の手を握ってくれたあの子の幸せそうな顔を見るにつけ、俺は胃の底からかき回したくなるほど苦しくなっていた。

「で？・・・・・・・・これから何しに行くの」

松木は手の中の封筒を大事そうに胸に抱きながら

「何って、学校に行って・・・・・・・・先生に報告を————」

「こんな早い時間にッ!?絶対まだ誰も来てないって」

もう我慢できなかった。俺は、松木をもうどこへも行かせたくなかった。腕の中に強引にあの子を抱き締めその温もりを感じて、俺は意を決さずにいられなかったんだ。何か、狂っていた。何が、『高校に受かった』だよ！もう本当は大学だって卒業してんだろ!?・・・・・・・・フザけるのもいい加減にしてくれよ。もういいよ、分かったよ。

———— やっぱ俺、まだ夢見てるんだろ？

だって、本当なら松木からメールが来るはずなんてないんだよ。あの子に俺のアドレスを聞かれてもいなければ教えてもないんだから。それに・・・・・・・・

「ちょっと何するの!?・・・やめてよ！」

「えっ——」

「他人（ひと）に見られたら、恥ずかしいじゃない」

小声でそうつぶやいてうつむくあの子は、ちょっぴり頬を赤らめていた。他人？
・・・こんな早い時間に？

「だから、まだ誰も——」

松木から目をそらした瞬間だった。・・・オイ本当に、こんな事ってあるのか？
知らないうちに俺たちは過去の分身が行き交う真っ只中に立ってたんだ。

「さっきから何ワケの分かんない事ばかり言ってるの!？」

突き飛ばすように距離を置いたあの子に冷や水を浴びせられた俺は、もう一度日付を
確認しようとスマホを取り出した。

「あ・・・え、オイ嘘だろ!？」

【2008/02/14/15:47_】

表示がバグったのか、そもそも俺が時間と曜日を間違えたのか——それとも
まさか・・・なあ。

「へへへ・・・ハハ・・・ハハハハ。いったい何がどうなってんだ？」

ひょっとして、俺・・・まだ寝てんのか？——考えてたら、無意識に乾いた笑いが
口を突いていた。未だに松木の夢を見てるなんて、どこまで俺は未練がましいんだ。
ホラホラ、ポーッとしてたらあの子あきれて行っちゃったぜ？いよいよ夢でも
嫌われちゃったか。もう二度と会えないのに、夢でも会えなくなっちゃうよ。

——それなら・・・せめて、夢だけでも。

「待ってくれ!!」

今、やっと気づいたんだ。たとえこれが夢だったとしても、松木の背中を見送る事なんかしちゃいけないって。あの子の未来（あした）を守ってやらなきゃダメだってな。

「もう何？ —— 私、急いでるんだけど」

慌てて駆け寄って、思わずキツめに腕をつかんでいた俺を冷淡に見返すあの子の顔つきこそ本当に懐かしかった。昔のようににらむ瞳は、俺に勇気を与えてくれた。

「俺も一緒に行くよ」

．．．．．ここで手を放してしまえば、何もかもが元通りになってしまう。それだけは耐えられなかった。二度も、あの子を失う事だけは ——

「．．．．．もういい」

もう、ついて来ないで —— うつむいたまま首を振ってそう言ったあの子の気持ちは、誰よりも分かってるつもりだった。でも

「ゴメン．．．．．無理だよ」

俺がそう言った途端、あの子はひどく焦りだしたんだ。まるで不審者にでも捕まってるみたいに自分の腕を振りほどこうと必死になっていた。

「ちょっと．．．．．お、放してよおッ!!」

でも俺は口を真一文字に結んだまま、松木の顔を見つめ続けるしかなかった。ただ、それが余計にあの子を不安にさせちゃったのか —— 目を潤ませて、言葉にならないほどの恐怖にうめきながら、どうにかしてこの束縛から逃れようとしていたんだ。

「泣きたいのはこっちだよ!!」

俺がそう叫んだ事で、ほんの一瞬だけ松木をあらぬ妄想から救い出せたようだった。その瞳にわずかに温かさが戻っていた気がした。本当のことを言うなら・・・・・・・・今しかないと思ったんだ。

「これが夢でもいい。目が覚めて、松木・・・・・・・・お前がいなくなってたっていい。でも、とにかく今だけは」

お前を助けたいんだよ!! —— 俺が訳の分からない事ばっか言うから。あの子の顔が、心が、また歪み始めたのは、誰にも明白だったろう。だから、望みを叶えてやる事にしたんだ。ただし、俺がそばにいるって条件つきで。

「ねえ、どこに連れてく気よ!？」

「学校だろ？」

報告しに行くんじゃないか —— 戸惑う松木の手を引っ張って、小走りで学校へ。その間もすれ違う奴らが、こっちをジロジロ見ながら何かを囁いてた。その度に、あの子がまだ俺を信じてないって事は分かったよ。でも気にしてる余裕なんてなかった。気にもならなかったんだよ!!

—— あの男子が、出しゃばるまでは。

「どうした、松木」

ヤツがちっぽけな正義感を出して声を掛けてきたのにビックリしたのか、あの子の足が止まっちまって。そしたら・・・・・・・・聞こえたんだ。あの子の、すすり泣く音が。何か、急に虚しくなって。これが夢なんだって思ったら、メチャクチャ寂しくて。その男子とケンカする気にもならなかった。

「・・・・・・・・行くぞ」

俺は松木の腕をクイツと引いて、また歩き出した。

『お願いだから、分かってくれ。もう、俺は二度と後悔したくないんだ』

って、心の中でずっと繰り返してた俺の言葉が聞こえたのかどうかは知らないが。ほんの少しだけあの子の足取りが軽くなったような気がした。だからあの子の後ろに回りこむように、つないだ手で前へと促して、そのまま背中をポンと押したんだ。

「さ、行ってこいよ」

なんて余裕ぶれるのも、もうそこが学校の敷地内だったから。とりあえず何事もなく、ここまでは来られた。俺たちの気持ちは、ずっとすれ違ったままだったけどな。

「終わったら、どっか行こうぜ？ —— お前の、好きなトコ」

精いっぱい強がりも、届きやしない。あの子の本心を知ろうとすればするほど、俺の口の中にはイヤな苦味ばかりが広がっていく。自分を放っておいてほしい
・ ・ ・ ・ ・ そんな松木の願望は俺にとって、絶望でしかなかった。

やっぱりこうして待っている時間は妙に長く、雑念が俺の心を支配する絶好の機会を与えていた。

あの子が、裏門から出て行ったりしないか ——

まさか、先生なんて連れてきたりしたら ——

でも、どうやらその不安はただの杞憂に終わりそうだった。

もうずいぶん前のように感じるほど懐かしさを覚えながら、俺は松木がたった一人で近づいてくるのを眺めていた。ボンヤリと西日に浮かぶあの子の表情がだんだんと俺への疑念を浮き彫りにしていくにつれて、視線を交わす事さえ恐ろしくなっていったんだ。靴音がすぐそばで聞こえた時には、もう背中を向けずにはいられなかった。

「・ ・ ・ ・ ・ お疲れ」

何も考えられなくなっていた俺がどうにか言えたこの一言は、『降伏宣言』って
いっても構わない。どうぞご自由に、煮るなり焼くなり好きにしてくれ —— って。

「ねえ、教えて」

「えっ、何の話」

口では平静を装っていても、松木の意外な言葉に俺の心臓は正直だった。このまま行けばいずれ力尽きて止まってしまうんじゃないかってくらい、飛び出しそうなほど激しく脈打っていたんだ。

「さっき、『私を助けて』って言ったじゃない。……なんで、あんな事言ったの？」

顔をそむけた俺の目の前にズイッと身を乗り出したあの子の真摯な眼差しは、燃えるような何かを感じさせた。怒りでも、愛でもなく——それは、真実への欲求に他ならなかった。

「もう時間空いてるんだろ？なあ、どこ行きたい？」

「ごまかさないでよッ」

「別にごまかしてないって。とにかく、お前は俺と一緒にいてくれればいいんだ。あっ、そうだ何か映画観に行こっか!？」

「だから、なんでよ!? どうして一緒じゃなきゃダメなの? ……ねえ」

何とか言ってよ!! —— 松木は、泣いていた。頬を伝う一筋の涙が、俺をためらわせる。

「今日一日だけでいいんだ。頼むから、俺と一緒にいてくれ」

そしたら、お前は —— あの子の両肩にそっと手をかけて諭すように言ってはみたけど、でもさすがに、次の一言はすんなりとは行かなかった。

—— お前は、死なずに済むんだ。

「怖がらないで聞いてくれよ？・・・松木、お前は本当はもう死んでるんだ。この後
帰り道で事故に————」

「やめて!!」

あの子は俺の腕を振り払って、後ずさりした。磁石が互いに反発するように俺たちは、
もう近づけなくなっちゃったみたいだった。

「俺だって信じたくなかったよ！・・・お前がさ、死んだなんて」

この腕の中にあの子を抱き締めて、そのままあっちへ————俺の生きてる世界へ
連れ去ってやりたかった。

「きっと風邪か何かで休んでるんだって、そう思ってた」

「・・・イヤ」

松木は、きつく目蓋を閉じて耳を塞いでいたけど、俺は構わず続けたんだ。聞こえて
なかったとしても構わないから、全てをぶちまけてしまいたかった。

「したら————先生が」

————『実は、松木さんは昨日・・・事故に遭って、亡くなりました』って。

．．．．．やっぱ、やめときゃ良かったかな。こんな話したって全ッ然スツキリしやしない。きっと今ヒドい顔してんだろうな、俺。壊れた蛇口みたいに、涙が止まんなくなっちまったんだもん。

「俺のこのカッコ見てみ？お前みたく制服も着てないじゃないか。だって俺もう四回．．．．．22だぜ？俺の世界じゃ、とっくの昔にいなくなっちまってるはずのお前がいて。しかもあの日とまったく同じ感じで、ホラそうやって合格通知まで持ってる。俺が誰だか分かってるか？中3の時、おんなじクラスだった —— 」

「もういいよッ!!」

松木は泣き腫らした目で俺をじっと見つめていた。震える唇には、疲れ果て苦悩する心が表れているようだった。

「“俺の世界”？ “私と同じクラス”？．．．．．フッ、ふざけるのもいい加減にしてッ!!!!」

そりゃ、そうだよな —— 7年後だー、おんなじクラスだーって聞かされる以前に．．．．．

『お前はもう死んでいる』

なんて言われりゃあ、誰だってキレちまうよ。

—— 私、ゼッタイ・・・・・死なないから。

少しばかり冷静になれば、これは全部俺の思い過ごしで夢と現実がまったく同じ結末を迎えるとは限らないと、凜とした松木の背中が教えてくれた。

「そうだよな?・・・・ゴメンな、変な事ばっか言って」

振り向いて首を振ったあの子は微笑んでいた。

「こっちこそ、ありがとー」

その真意がどこにあるのか、俺はぎこちない顔で固まって軽く首をひねっていた。

「えっ、分かんない? —— ホラ、普通だったら私は一人で帰ってて。時間も・・・・とっくに家に着いてる頃でしょ?」

“したり顔”で覗き込んだあの子が、暗い森をさまよう俺の手を取って一気に駆け抜けていく。そのあまりの速さに、思わず口元がニヤリと緩んで

「そっか・・・・事故るんだったら、もう —— 」

「うんっ!!」

明るくそう言って、松木は俺の胸に飛び込んできた。やっとなびっきりの笑顔を見せてくれたあの子をしっかりとこの腕で抱き締めると —— 本当に、その時ほど生（せい）の感覚を、温もりを感じた事なんてなかったよ。

すべての感覚があいまいになる、夢の中にいるはずなのに ——

「えっ、泣いてるの？」

ねえ ——— 松木がいくら穏やかな顔でこっちを見つめても、今の俺に取っちゃ……………
中学時代に、事あるごとに俺を厳しくなじってたあの頃が懐かしすぎて

「だってさ、せっかくお前がこうやって生きてるのに……………」

これ、夢なんかもん ——— しつっこいだよ俺。案の定、あの子の笑顔が曇った。
きっと内心は呆れ果ててるに違いない。いっその事、昔みたいな態度で接してくれりゃあ
いいものを、優しいあの子は

「まだ言ってる……………そんなに信じられない？私がここにいるの」

愁いを帯びた表情を浮かべて、諭すようにそう言ったんだ。

「なあ、俺の事……………どう思ってる？」

だから俺は、松木に甘えてこんな事を口走っていた。何となく、もう時間がないような
気がして。

「どうって？」

「だからホラ、あれだよ……………好きとか嫌いとか、そういう」

今までちゃんと聞けなかったから ——— 自分の中じゃ結構思い切ったつもり
だったんだけどあの子の微妙な表情は、何て言えばいいんだろうな。たぶん俺の気持ちは
伝わってると思うんだ。

——— じゃあ……………コレで。

不意に松木が背伸びする感じで顔を近づけてこうささやいた次の瞬間、ふたりの時間が止まった。もう完全に主導権を握られてしまった俺は、あの子の冷たい鼻先が触れるほど近くで互いの温もりが溶け合うのを感じていた。この —— 唇の先で。

「分かった？ 私の気持ち」

なんて明るく言われたところで真っ白になっていた俺の頭の中にポツンと落ちた赤いインクが、ゆっくりジワジワと広がっていくように体が熱っぽくなっていくのを感じるのがやっとだったけど

でも —— あの子は、ふたつの謎に答えてくれたんだ。

「そろそろ、帰ろっか」

あの子の気持ちと、俺も夢を見てるわけじゃなかったんだって事が分かって安心したから (?) 辺りが夕焼けに染まっていたのに気づいちゃって、こんな事しか言えなかった。もっと気の利いた事でも言やあ良かったんだろうが 無理だよなあ。

「そうだね もう、暗くなっちゃうし」

あの子は、ちょっとがっかりムードだった。そりゃそうだよ、ゴメンな松木。

—— ホント情けねえ。どこまで俺は鈍感なんだか。

「ほい」

突拍子もない俺の行動に、松木は目を丸くしていた。やっぱり、結構なスピードで道路を走り交う車なんて見ちゃったら・・・ちょっとは不安になるって。

「どうしたの？」

「んやあ・・・手、つなごうよ」

って俺が言った瞬間のあの子の顔ってなかった。

「うん」

少し間があって、そんなに嬉しそうでもなかったけど俺の手をギュッと握って

「まだ心配？私が車に轢かれるんじゃないかって」

そう呟いたあの子には、何もかもお見通しだったらしい。俺の咳払い（敗北宣言）に、クスクスと笑っていた。

薄暗い横断歩道で信号待ち————— 今、松木の運命は俺と共にある。緊張で体が火照っていた俺には凍えるような風すら気持ち良くて、思わず背伸びなんかしちゃって。

『あ————— あの喫茶店・・・えっ、オイもしかしてここは』

そうなんだ。この場所こそ、あの子の命が奪われた交差点だった。否が応でも握る手に力が入っちゃう。

「今日、風強いよね」

松木はそう言って身震いした。

「ああ」

俺はあの子の体をさすりながら、辺りに目を配った。今のところ、おかしな車はいなかったんだけど、空気が乾いてるのか妙に埃っぽかったんだ。

「あっ、青なった！行こ？」

これを渡りきればもう大丈夫だって、俺には信号の青が天使の色に見えた。

なのに、どうして——— !!!

「・・・・・・・・あっ」

「どこ行くんだよッ!？」

その時だった。ハンカチを拾い上げ、申し訳なさそうにはにかむあの子をヘッドライトの逆光が照らし、何か言おうとしたその言葉をクラクションの轟音がかき消したんだ。

——— これ、夢じゃないんだろ？何の因果か、7年前のこの場所に立たされた俺がまた松木を死なせるって・・・・・・・・そんな事出来るわけじゃないか。

・・・・・・・・レールには、俺が乗ってやるよ。

【お知らせ】

この物語には、結末が二つ用意してあります。
つまり、主人公の運命は読者であるあなたの選択に委ねられているというわけです。

【陰道- 現実-】編

そして

【陽道- 夢-】編

このどちらを選ぶもあなた次第、その日の気分でお好きな方をお選びいただければと ——— 。

なお、どちらの結末にも主人公の初恋の相手『松木恵里』が登場するんですが……
その選択によっては、彼女の性格に大きな影響を及ぼす事になるでしょう。また、一方の結末では本編中に登場した

“とある男子”

の素性が語られています。

それでは、そろそろ最終章への幕を上げたいと思います。

【陰道- 現実-】編をお読みにになりたい方は、次ページへ

【陽道- 夢-】編をお読みにになりたい方は、目次より当該（PDF 版は 39）ページへ

お進みになって、続きをお楽しみ下さい。

———最後までお席を立たれぬよう、よろしくお願いいたします。

【陰道 - 現実-】

松木を突き飛ばしてトラックの前に出ていった俺は、ものの見事にはね飛ばされちまった。
えっ ——— メチャクチャ静かじゃないか。ひょっとして、もうここは……あの世なのか？
それにしたって、俺を覗き込んでるこのオヤジは？って事あ

——— まだ俺は、生きてる……のか？

「ああっ、俺はぁ……とんでもねえ事しちまった」

ホントそうだよ……よくもまあ、俺を吹っ飛ばしてくれたもんだぜ。

「おいお嬢ちゃんッ、あ……アンタ、この兄ちゃん見ててくんねえか!？」

あっ、松木い ——— オイオイちょっと待ってくれよッ、泣いてるじゃないか。
可愛い顔が……台無しだぞ？

でも、やっぱコレ夢だったんじゃないの？ちっとも痛くないし、今すぐにでも
起き上がれそうな気がしたんだけど ——— やっぱり、今この場所じゃあ俺は
死にかけてるって事なのかなあ。体は全ッ然動かねえもん。

「俺、きゅっ救急車呼んでくっからッ!!!・・・・・・・・なッ!？」

—————そんな事しても無駄なのにねー。

オイ何だ・・・・・・・・!!急に、痛みが。

「ひさしぶり♪」

お前・・・・・・・・その声は、まさか!？」

「助けてくれて、ありがとうね。・・・・・・・・アンタだったら、きっとこうするだろうって
思ってた」

なんでお前が!？どうして・・・・・・・・松木が二人も？だいたいホントなら、あの日に
死んでるはずじゃあ

「そうね、7年前にここで？トラックに轢かれて・・・・・・・・って、キャハハハッ!!
だ〜か〜らあ・・・・・・・・今日だってば」

なら、もういいや。夢って事にして、早く俺の目を覚まさせてくれよ。

「まだ分かってないの!?何のために私がアンタなんかにキスしたと思ってるのよ……………
ホラッ、こうやって踏んづけたら痛いでしょうが!!」

くっ、コイツ本当に……………!!へっ、イイよ。やっばお前は、そっちでなくちなア……………。
そんなに俺が嫌いなんだったら、もうサッサと殺っちまえばいいじゃないか。

「そんな簡単に逝かせてたまるかって。どうせ放っといたってアンタは死ぬんだから。
それまで、一緒に楽しく喋っててあ・げ・る」

じゃあ聞いてやるけど、これが現実だとして……………なんで俺が、この時代に？

「知りたい？だよねー。だいたいさア、怪しいって思わなかったの？死んだ人間から
メール来るなんて。まあ、私に“盲目の愛”を捧げちゃう勢いのアンタなら、とりあえず日曜
とりあえず会いましょ、とか言っとけば……………ね？こうやって信じたわけじゃん？
なあ～にが

俺にとっては恋だの愛だのっていうのは———— さほど重要じゃないんだ

だっつーの。結局、私にハメられてんじゃない。ホント、馬鹿だよねー」

お前ッ……………クソッ、足がつかめねえ。

「あんっ、もう・・・・・・・・うっとうしいな。あっ、そうそう！聞きたいんだけどー
今まで、夢に私が出てきた事あるでしょ？」

何が言いたいんだ？

「もうホント、寒気するくらいイチャイチャして。デートしたり？フフッ、これ言っちゃったら
どんな気持ちになっちゃうかなア。喜ばせちゃうかもなァ♪」

マジかよ・・・・・・・・いいな、早く喜ばせてくれよ。

「あれ、ゼッええ〜んぶ現実だったんだよ！・・・・・・・・アンタのお蔭で死なずに済んだ私、
ね？この22歳の私が、ちょっとしたウラ技でアンタをタイムスリップさせて、願いを
叶えてやったの。だって、せっかく助けてもらったんだもん。何かやっぱり、お礼しなきゃって」

じゃあ、俺は・・・・・・・・本当に松木と？あれだけ、見向きもしなかったあの子が？

「だからそれ、アンタのせいだよ。7年前に私がアンタを無視してたのは・・・・・・・・
今のアンタと付き合ってたから！」

なるほどな・・・・・・・・俺は、ずっとお前の手のひらの上で転がされてたってわけか。

「アンタさ、自分の意志でトラックの前に飛び出したって思ってるよね？」

当たり前じゃねえか。俺は、あの子を・・・・腐りきった今のお前でも他の誰でもなく俺の愛したあの日の松木を助けるために。

「じゃ、今ゼッツイタイ後悔してるでしょ!?こんなゲス女になるんだって分かってたらあんな馬鹿な真似しなかったのにね♪・・・・でも、コレはこうなる宿命だったの。分かる？運命なんて甘っちょろいモンじゃない。シुकメイなんだよ」

フザけんな。こんな馬鹿げた宿命なんてあつてたまるか。俺が・・・・お前のメールを無視すりゃいいんだろ？それだけで、お前は“予定通り死んでくれる”んだから。

「話聞いてた？ワぁタぁシいは～、今ここでアンタが無茶して助けたこの松木恵里なのよ!?今までアンタを楽しませてたのもメール送ったのもみんなみんな・・・・」

———私がやったんだって!!!

「はあ～あア、もう。ここにいる……………ホラ、中3の私が言った事覚えてる？」

『私、ゼツタイ……………死なないから』

って、そんなこと絶対に有り得ないのに。……………言ったでしょ？宿命って、そう簡単に
変えらんないんだよ？コレ。“合わない鍵で、無理やりこじ開けようとする”から、
こうなるのよ」

フンッ……………でも、ありがとな？これで7年前の松木が生き残ったんだから、俺が
お前の『迷惑メール』に騙される事も

「そういうわけには……………行かないんだなア」

!!……………おっ、お前!?何て事を……………そんな事して、どうなるか分かってんのか!!

「分かってるよ？とにかくここで“私”に生きててもらっちゃ困るわけ。じゃないとね？
まさにこの場所で、こうやってアンタが死ぬまでのシナリオがぶち壊しになっちゃうんだ。
……………こっち（7年前）のアンタには、ずううううっと私への未練を引きずって
生きてってもらわなきゃ♪」

「あなた、誰……………なの———？」

「えっ、私？……………さあ～あ、知らなあい」

その時だった。松木の胸に深々と突き刺されたナイフを引き抜いて、真っ赤な返り血を浴びたアイツ（7年後の松木）の手が透け始めたんだ。

「あっやバツ！もう時間ないじゃん!?!? えー、スマホっ、スーマホお〜っと。
あったあったッ!!」

アイツが拾ったのは、飛ばされた俺のスマホだった。徐々に色褪せていく指先で、必死にボタンを押し続けている。

「ほら、メアド分かんないと送れないじゃん!?!『迷惑メール』♪」

そっか そういう、カラクリだったんだ。ハハハ、負けたよお前には。

———あと、学校で私に気づいて声かけてきたあの男子 いたでしょ？アイツと少しでも絡んでたら、ひょっとしてこんな悲惨な感じにならずに済んだかも？だってアレ『中3のアンタ自身』だったんだよ？

「そんじゃっ、またメールするね？ばいばあ〜い！」

最後まで小憎らしい笑顔のまま、アイツはフェードアウトしていった。その直後から俺の体は全身激しい痛みにかきしめ始めた。焼けるように熱い 胸が、苦しい。
すぐ目の前には、無残に横たわる松木の姿があった。

『こんなに近くにいるのに・・・・・・・・お前を、助けてやれなかった』

冬の風は、あの子の最期の温もりさえも容赦なく奪っていた。俺は最後の力を振り絞って腕を伸ばしその手を握りしめた。でも・・・・・・・・もう、すでに硬く、冷たくなってしまっていたんだ。

『待っててくれよ、恵里・・・・・・・・すぐに俺も————』

「早くッ！こっちです、こっち!!」

「うわ、こりゃあひどいなァ・・・・・・・・二人？」

「え・・・・・・・・アレッ!?女の子まで、なんで」

「ま、とにかく詳しい話聞かせてもらうから。・・・・・・・・しかし」

仲がイイねえ。手なんかつかないじゃって————

すべての始まり

———お久しぶり、恵里です。

突然そんなメッセージが飛び込んできたのは、昨日の事だった。たしか夜中の3時ごろだ。床に投げていたスマホのパイプが俺を叩き起こしたんだ。ボンヤリした頭で拾い上げて画面を覗き込むと『メール着信』の眩しい白い表示が。また、友達になりすました『迷惑メール』の類かと思ってた。でも、タイトルに記されていた名前を見た俺の寝ぼけた頭は一気に冴えわたり、いてもたってもいられなくなってメールを開いていた。

送り主は、初恋の相手だった。

【陰道- 現実-】 編 完

【陽道 - 夢-】

ここは・・・・・・・・俺は、死んじゃったのか？

当たり前だよな、トラックに正面からぶつかって助かるわけないもん。それにしたって
——— なんて、痛くも何ともないんだろうな？まさか、即死だったとか!?うわー、
だとしたら何か急に寂しくなるっていうか、ガッカリするっていうか・・・・・・・・

はア ——— 短い人生だったなあ・・・・・・・・。こんなの、走馬灯もクソもないじゃんか。

「あっ!!」

逆に考えれば、やっぱり夢だって事も有り得るんじゃあ？これだけ何の感覚も
ないんだから・・・・・・・・でも、個人的にはあの時に松木と交わした

抱擁（ぎゅっ!）

と

接吻（チュッ!）

だけは、現実（リアル）であってほしいんだけどなあ ———

——— ふふふ、安心して？

えっ、今誰か・・・・・・・・何か言った？

——— あれは、夢なんかじゃないよ。

って事は・・・・・・・・俺は、やっぱり

「即死だったんだ・・・・・・・・」

——ううん、あなたはちゃんと生きてるわ。

「どういう事だよ？じゃあ、ここはどこなの」

——ここ？ここは、“時空（とき）のはざま”って言ったらいいかな。

何だそりゃあ？・・・・・・・・ま、イイか。とりあえず俺は無事みたいだし♪
って、オイッ!!安心してる場合じゃないぞ!?!じゃあ、死んだのは

——そう。死んだのは・・・・・・・・あの子。

「う・・・・・・・・ウソだよ～。だって俺、思いっきり松木を突き飛ばしてトラックに
ぶち当たったんだぜ？ホントの事言ってくれって。なあ、ホントは俺が
死んだんだってッ!!!」

———実は、私が時間を少しだけ戻したの。あの子を助ける寸前に、あなたをここへ。

「なんで・・・・・・・・何でそんな余計な事してくれたんだよ？アンタの言うとおりに、あれが現実だったんなら、松木が。俺のいちばん好きだったあの子が生き返ったかもしれないのに!!」

———ごめんなさい。

「アンタいったいどこの誰なんだ？勝手に俺をこんなトコに連れてきやがってさ・・・・・・・・ぶん殴ってやるから、隠れてないで出てこいってんだよ!!!」

その時だった。俺の目の前にまばゆい光が広がったかと思うと、一気に光のかけらが弾け飛んでそこに、ひとりの女の子がたたずんでいたんだ。

「・・・・・・・・お久しぶり」

彼女が口にしたその言葉と声には、どこか聞き覚えがあった。それに何より、あまりの眩しさに手で目元をかばっていた俺の視界、指の隙間から覗いていたその顔は・・・・・・・・

「おい・・・・・・・・まさか、お前」

「中学卒業以来ですね。 まあ私は、卒業できなかったんだけど」

彼女はうなずいて、少し気まずそうに微笑みながらこう言ったんだ。それは、
紛れもなく

俺の初恋の相手、松木恵里だった。

もちろん俺と同じ年で22になってはいたけど、面影は昔のまんまだった。 !!
それじゃあますます分かんないよ！どうして自分を殺すような真似を？

「なんで、こんな事したんだよ お前、助かったのに」

「私は あなたが『一緒にいてくれ』って説得してくれた時には、本当はもう
大丈夫だったんだよ？だから、今こうしてあなたと話してるのはその時に救われた私」

「そうだったのか あ、じゃああそこでお前の言った事当たってたんだ」

「『私、ゼッタイ 死なないから』って？」

俺はうなずいた。ホントならもっと晴れやかな顔を見せてやれたはずなのに、出来なかった。
あの日、あの場所でハンカチさえ飛ばなけりゃ 俺たちは。

「生き返ったっていうより、気づいたら自分の部屋のベッドで寝てて。私ホントにあの時はどうなっちゃったのかって思った。でも、よく考えたらあの時に彼——いや、あなたが必死になってくれたからだって。……正直、あなたがクラスメイトの“あの男子”と同一人物だなんて思ってもなかったんだけど」

まあ、な？7年も経てば、ちょっとくらいは見た目もマシに——

「ちょっとガッカリしたろ」

「そんな事ないよー。だから私は神様にお願いして、あなたを過去に連れてってもらったの。あなたの世界には、もう存在しない私と楽しく過ごしてほしかったから……」

そういう事だったのか。じゃあ、今まで夢の中だと思っていたのは何もかも現実——
本当の出来事だったんだ。

「ありがとな……俺、ホント嬉しいよ」

今ここにきて、ようやく俺は松木の本当の気持ちにたどり着けた気がした。
だから、せっかく顔を上げて笑いかける事が出来たのに、彼女は、どこことなく悲しげだった。

そうか……俺が生きてるって事は、もうあの子は。

「ごめん、笑えないよな。代わりにお前は、死んじゃったんだもん」

「ううん、私はいいの。．．．．．やっぱり、宿命ってそんな簡単に
変えられないんだなあって」

え ———— ？

「私が生きてる理由って、あなたが私と一緒にいてくれたからだって．．．．．
ずっとそう思ってた！でも、本当は」

あなたが身代わりになってくれたから—————

．．．．．たしかにあの日は妙に埃が立っていて、おまけに風も強かった。
それさえなけりゃ、松木はあんな事にならずに —————

『今日、風強いよね』

そうつぶやいた時には、もうあの子は同じ運命のレールに乗ってしまっていたのかもしれない。

「あなたが説得してくれた時には、私の運命も変わったのよ!?. せっかく、私の命を
救ってくれたのに！だから、私は現在（いま）のあなたが7年前の自分と幸せに
暮らせると思って．．．．．でも、そんなまさか」

目にゴミが入るなんて—————

「やっぱり私、死んじゃうんだって……正直、悲しかった。もう、この体も消えちゃうのかなあって」

彼女がこんな事を言ったからなのか、俺にはその体がわずかに透けているように見えたんだ。

「オイひょっとして、もう消えかけてるんじゃないのか!？」

「私？まだ、大丈夫だよ。これ……ホログラムだから」

聞けば彼女は別の部屋にいて、そこに備え付けられているモニターで俺たち——
7年前の松木と現在の俺を見守ってくれていたらしい。

……ってことは、当然あの子がトラックに轢かれそうになったあの事故も。

「自分が死んじゃうトコロなんか見らないでしょ？……だから私モニター切ったんだ。
そりゃ怖かったけど、まだマシだもんね」

たしかにそうだ。でも結局、いつまで経っても消える事はなかった。彼女の肉体はまだ存在していたんだ。恐る恐るモニターを入れた瞬間、そこに広がっていた光景に啞然とする。

「倒れてたのは・・・俺だったわけか」

彼女は切なげに瞳を潤ませてうなずいた。

「ショックだった。・・・私が生きてる本当の理由が、あなたの犠牲だったなんて。だって、本当なら私死んでたんでしょ!?!?・・・こんなの」

虫が良すぎるじゃない!! —— 松木が初めて見せたその感情に思わずたじろいでしまった俺はもう何も言えなかった。

『そんな、独りだけでしょい込むなよ。お前はなあ～んにも悪くないんだぜ? そりゃ俺だってお前が死んじまってからずうずうつと、色々考えてたさ。断られてもいいから告白（こく）っとけば良かったかなあとか。何とかして、お前を助けられなかったのかなって。それで・・・あの夢だ。いや、ありゃ現実か。あの日だよ・・・な? お前がまだ生きてる。初恋の相手がこれから死ぬかもしれないのに、何もしねえヤツなんかいるか? その答えが、アレなんだよ』

心の中じゃ、実に雄弁な俺も・・・

—— でも、俺が選んだ宿命（ルール）なんだよ。

この一言に思いを集約するのが、やっとだった。

「な？・・・・・・・・俺が勝手に助けようと思って、勝手についてって、勝手にトラックに飛び出してっただから。さすがに、ちょっと強引な気はしたけど」

お前が助かるなら—————彼女が俺を過去へ遣ったホントの理由が、死んだはずの自分が生きている、その謎を解くためだったとしても構わない。だって、俺的には結果オーライだったんだもん！

『ハツコイの成就』・・・・・・・・これは、大きいってホント。

「あなたがそう言ってくれるなら、私も・・・・・・・・もう安心して戻れる」

「待ってよッ、その・・・・・・・・ホログラムなんかじゃなくって、お前もこっちに来られないの!？」

「ゴメンね・・・・・・・・もう、時間が」

首を振って涙を零しながらも気丈に笑顔を見せる松木を、俺はそっと抱きしめた。不思議な感じだったな。たしかに彼女の体は、もうかなり透き通っていた。実体はないように思えた。なのに腕の中には、あの日と同じ温もりがあった。俺の背中に回る細い腕さえも感じたんだ。

午前3時の電話

その夜は、いつにもまして長い夢を見ていた気がする。体を起こしてボーっとする頭を抱えていた俺に昼間なら何て事のない、ガチャガチャした着メロが追い打ちをかけていた。目蓋を閉じたまま、手探りでスマホを手に取ったその流れで……俺は、その奇妙な電話に出たんだ。

「ハイ……もしもし？」

——久しぶり。

「は？……おたく、誰」

——夢の中の……彼女、かな。

「あー、そうですか。……あの一、どなたか知りませんが。それ、見え透いてますよ？」

———ホントよ？

「ちょっと、こっちも疲れてるんだよ。いい加減にしてくれねえかなあ・・・・・・・・
だいたいアイツは」

———中3の時に事故で死んだ。・・・・・・・・でしょ？

「何で知ってる？・・・・・・・・あっ！ひょっとして、おんなじクラスだったり」

———そうだ！・・・・・・・・数学教えてくれたよね、放課後の補習で。

「え・・・・・・・・」

———英語じゃなかったから、大変だったんじゃない？

「分かった分かったッ。・・・・・・・・じゃあ、もし仮におたくがアイツだったとしたら
・・・・・・・・何の用？」

———えっと・・・・・・・・あのね？信じてもらえないかもしれないんだけど。私、魔法で
ちょっとの間だけ生き返らせてもらったんだ。

「はいはい・・・それで？」

——うんッそれでね？・・・これが聞きたかったの。今でも、私のこと好きでいてくれるのかなあって。

「それだけ？」

——うん。

「好き」

——えっ？

「だから、好きだっつーの。・・・だって、未だに夢見んだから。ふたりで映画行ったり、遊園地行ったり。とにかくラブラブになってるヤツ」

——そうなんだ。・・・良かった。

「これで、満足ですか？愛しのエリーちゃん」

——ありがとう。ゴメンね、こんな時間に電話しちゃって。

「ふわ・・・ああ～ああ。いやあ、別にいいんだけどさあ。もう、そろそろイイツるか？また・・・眠くなってきちゃったから」

——そうだね。・・・おやすみ。

「おやすみい～。続きはまた、夢で話そうぜ？・・・zzzzZZZZ」

——うん、また・・・・・・・・夢で逢おうね？

・・・・・・・・カッコいい魔法使いさん♪

【陽道- 夢-】 編 完